

こんにちは。今回は二〇二五年京大國語、文系・第三問(古文)にチャレンジしてみよう(理系の問題は別の機会に解説します)。京大の古文としては珍しい出典で文章も長いですが、設問自体は難しくなく、その分だけ丁寧な読解・訳出が必要でした。力試しにはもってこいの問題と言えます。

次の文は、『義経記』の一節である。源義経(判官殿)は、兄頼朝(兵衛佐)の討手を逃れて陸奥へ下向するにあたり、北の方と一緒に連れて行くとするが、まず北の方の気持ちを確かめるため、その住まいを訪問した。これを読んで、後の問に答えよ。(五〇点)

判官殿をば中門の廊に隠し奉りて、弁慶妻戸の辺に立ち寄りて、「もの申さん」と言ひければ、「何処より」と答ふ。「堀川の方より」と申しければ、妻戸を開けて見ければ、弁慶にてぞありける。

日頃は人伝にこそ承りしに、あまりの嬉しさに、北の御方御簾の際に立ち寄りて、「人は何処にぞ」と問ひ給ふ。「堀川におはしますが、明日陸奥へ御下り候ふが、『申せ』との仰せの候ひつるは、『日頃の御約束は、いかなる有り様をしても具足し参らせんと申して候ひしかども、道々どもみな塞がれて候ふなれば、人をさへ具足して憂き目を見せ参らせん事、いたはしく思ひ参らせ候へば、義経先に下りて、もしながらへて候はば、秋の頃は必ず御迎ひを参らせ候ふべし。それまで御心長く待たせおはしませ』とこそ仰せ候ひつれ」と申しければ、「この度だにも具して下り給はで、何故に迎ひを給はるべき。下り着き給はざらん先に、老少不定の習ひなれば、ともかくもなりたらば、とてもかくても逃れざりけるもの故に、など具して下らざりけん⁽²⁾と後悔し給ふとも、甲斐あらじ⁽³⁾。御志ありし程は、^{*}四国西国の波の上までも、具足せられしぞかし。さればいつしか変はる心のうらめしさよ。大物の浦とかやより都へ帰されしその後は、思ひ絶えたる言の葉を、また廻り来て、とかく慰め給ひしかば、心弱くも打ち解けて、二度憂き言の葉にかかりぬるこそ悲しけれ。申すに付けて、いかにと覺ゆれども、我いかにもなりなば、後の世までも罪深き事と聞く程に申すなり。過ぎぬる夏の頃より心乱れて苦しかりしを、ただならずと人の申すを、月日に添へて身も苦しくなりまされば、その隠れあるまじ。六波羅へも聞こえなば、兵衛佐

は情けなき人と聞けば、捕りも下されんずらん。ただ今憂き名を流さん事こそ悲しけれ。
⁽⁴⁾何と言ひても、人の心の強きなれば、力なし」と、打ち解け涙も堰き敢へざりければ、
武蔵坊も涙を催しける。

灯火の影にて、常に住み給へる御障子の程を見れば、御手と覚えて、かくぞあそばしける。

⁽⁵⁾つらからば我もこころの変はれかしなど憂き人の恋しかるらん

とありけるを、弁慶見奉りて、今の御言葉は、忘れ参らせ給はざりけるとあはれにて、急ぎ判官殿にかく申せば、「さらば」とておはしまして、「御心短き御恨みかな。義経も御迎ひに参りて候」とて、ふと入り給ひければ、夢の心地して、訪ふにつらさの涙堰き敢へず。

(『義経記』より。一部省略)

注(*)

弁慶Ⅱ武蔵坊弁慶。義経の家来。

堀川Ⅱ京都の地名。当時、義経の屋敷があつた場所。

四国西国の波の上までも、具足せられしぞかしⅡこれより以前、義経は北の方らを伴つて船で四国に逃れようとしたが、暴風に遭つて引き返し、吉野山に潜伏した。その際、北の方は都に帰されていた。

大物の浦Ⅱ現在の兵庫県尼崎市の地名。義経一行が四国を目指して船出した場所。

六波羅Ⅱ京都の地名。当時、頼朝の代官がいた場所。

問一 傍線部(1)を、適宜ことばを補いつつ、現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)はどういうことか、説明せよ。

問五 傍線部(5)を、適宜ことばを補いつつ、現代語訳せよ。

【解答】

問一 妻であるあなたまでも連れて辛い目を見せ申し上げるようなことは気の毒に思い申し上げますので、私義経が先に陸奥へ下向して、もしも私が生きながらえてございますならば、秋の頃には必ずお迎えを参上させましょう。

問二 義経が今回の下向に北の方を同行させないならば、人はいつ死ぬか分からないものなので、北の方が死ぬかも知れず、その後に義経が同行させなかったことを後悔しても無駄であろうということ。

問三 以前に四国へ逃れた際は義経の北の方への愛情が深く、同行させてくれたのに、今回は陸奥へ同行させないということは、早くも義経の気持ちが冷めてしまったと思われ、恨めしいということ。

問四 北の方が自らの辛い思いや妊娠、頼朝への恐れをいかに訴えて同行を願っても、義経の心は強情なので、どうしようもないということ。

問五 私北の方を迎えに来てくれない義経様が、私に薄情であるのならば、私も同じように義経様への気持ちが変わってしまえよ。どうして私は恨めしい義経様を今も恋しく思っているのでしょうか。

【解説】

問一 「人をさへ具足して憂き目を見せ参らせん事、いたはしく思ひ参らせ候へば、義経先に下りて、もしながらへて候はば、秋の頃は必ず御迎ひを参らせ候ふべし」

ことばを補いつつ、現代語訳する問題。方針としては、**文法・単語に忠実に訳しつつ**、**主語・目的語などの言葉を補っていく**。この設問のポイントは「敬語」である。まず前後の文脈から傍線部が弁慶のセリフ内で引用された義経のセリフであることを掴む。そして、冒頭の「人」については「見せ参らせん」と義経が謙譲語を用いていることから「北の方（あなた）」と特定、次の「思ひ参らせ候へば」は尊敬語がないことから主語は「義経（私）」、というように丁寧に敬語関係を押さえよう。その他、添加の副助詞「さへ」、古文単語「下る」などは基本的な知識である。

問二 「後悔し給ふとも、甲斐あらじ」

傍線部説明問題。方針としては**傍線部を訳したあと、理由や説明などを補っていく**。傍線部前の「ともかくもなりたらば」の内容が把握しづらいが、直前にある「老少不定（人の命は定まらないもので、老人が先に、若者が後に死ぬとは限らないこと）の習ひなれば」から推測すればよい。現代語訳ではなく説明問題なので、「私・あなた」などの代名詞は避け、「北の方・義経」などの客観的表現で書くようにしよう。

問三 「いつしか変はる心のうらめしさよ」

傍線部説明問題。方針としては問二と同じ。傍線部「いつしか」は「早く・すぐに」。直前の「志」には「愛情」という意味があることは知っておこう。すると、「愛情があった時は四国まで連れて行ってくださったが、すぐ変わるあなたの心が恨めしい」というくらいまでは訳せるだろう。後は過去と現在を対比させ、過去は「愛情があった」が現在は「愛情が無くなった・冷めた」、過去には「四国まで連れて行ってくれた」が現在は「今回は連れて行ってくれない」と明確化する。

問四 「何と言ひても、人の心の強きなれば、力なし」

傍線部説明問題。方針としては問二と同じ。傍線部は「あれこれ言っても、義経の心は強情なので、どうしようもない」と訳せる。「人」は文脈から「義経」、「強き」は「強い」よりも「強し（こほ強情だ）」で理解しよう。あとは「あれこれ」の内容を直前の記述から明確化する。北の方のセリフの末部であるので、北の方の状況や心情をまとめる意識も持つとう。傍線部前の「**ただならず**」は「**妊娠している**」という意味の古文単語なので知っておこう。その他は特に難しい部分はない。

問五 「つらからば我もこころの変はれかしなど憂き人の恋しかるらん」

和歌の現代語訳問題。和歌設問の方針としては、**まず前後の文脈から「誰がどんな気持ち」を詠んでいるか」を掴み、次に和歌全体を文法・単語に忠実に訳した上で、掛詞や内容の説明を加える**。なお、今回の和歌に掛詞は無かったので、内容の説明のみでよい。今回はまず前後の文脈から傍線部が北の方の和歌であり、内容は直後の記述から「北の方は義経のことを忘れていない」であることを押さえる。ポイントは「**つらからば**」の訳だが、「我もこころの変はれかし（私も気持ちが変わってしまえよ・「変はれ」は命令形、「かし」は念押し（終助詞））」の「**我も**」に注目すれば、「つらからば」の内容は「**義経が心変わりした**」ことだと推測でき、未然形＋接続助詞「ば」も考慮すると、「義経様が私（北の方）に薄情ならば」という訳ができる。なお、古文単語「つらし」は「薄情だ・冷淡だ」と（他者に薄情にされて）辛い」の両方の意味があるため、「義経様が心変わりをして私が辛い思いをするならば」と訳してもよい。後半は「人」を「義経」と明確化しつつ、現在推量の「らむ」に注意するだけでよい。

【現代語訳】

判官殿（義経）を中門の廊下に隠し申し上げて、弁慶は妻戸の辺りに立ち寄って、「申し上げます（ごめんください）」と言ったところ、（北の方は）「どこから（いらしたのですか）」と返事する。（弁慶が）「堀川の方からです」と申し上げたところ、（北の方は）妻戸を開けて見たところ、弁慶であった。

（義経のことを）普段は人伝でお聞きしていたが、あまりに嬉しくて、北の方は御簾の端に立ち寄って、「人（義経様）はどこですか」と聞きなさる。（弁慶は）「堀川にいらつしやいます、明日陸奥へ下向なさいますが、『（北の方に）申し上げなさい』と仰せがございましたことには、『日頃の（あなたとの）お約束では、どのような格好をしてでもお連れ申し上げます』と申し上げてございましたが、多くの道が皆塞がれてございますようなので、妻であるあなたまでも連れて辛い目を見せ申し上げるようなことは気の毒に思い申し上げますので、私義経が先に陸奥へ下向して、もしも私が生きながらえてございますならば、秋の頃には必ずお迎えを参上させましょう。それまでお気持ちを長くお待ちください』と仰せがございました」と申し上げたところ、（北の方は）「（義経様は私を）今回でさえ連れて下向しなさないで、どうして迎えをいただけるだろうか。下向して到着なさないうちに、老少不定（人の命は定まりません）もので、老人が先に、若者が後に死ぬとは限らないこと）の習いであるので、あれこれとなった（私が死んだ）ならば、『どうしても逃れられなかった運命であるので、どうして連れて下向しなかったのだろうか』と後悔しなすっても、どうしようないだろう。（義経様の私への）ご愛情があった頃は、四国西国の波の上までも、連れて行ってくださったことだよ。そうであるので、すぐに変わる気持ちの恨めしいことよ。大物の浦とかいう所から都へ帰された後は、（義経様は私が）諦めていた言葉を、また送って来て、あれこれ慰めなされたので、意志の弱いことにも気を許して、再び辛い言葉に引かかってしまったことが悲しい。申し上げるにつけて、どうかと思われるが、私がどのようなでもなる（死んでしまう）ならば、来世までも罪深いことと聞くので申し上げますのだ。過ぎてしまった夏の頃から気持ちが乱れて苦しかったが、妊娠していると人が申すが、月日が経つに従って私の身も次第に苦しくなるので、そのことが隠れもない事実だろう。六波羅にも噂が聞こえたならば、兵衛佐は無情な人だと聞くので、追っ手も下されるだろう。すぐにも辛い名声を流すようなことが悲しい。あれこれ言っても、義経様の心は強情なので、どうしようもない」と、気を許して涙も塞き止められなかったので、武蔵坊（弁慶）も涙を催した。

灯火の光で、（北の方が）常に住みなさっている（住居の）御障子の辺りを（弁慶が）見ると、（北の方の）語筆跡と思われる文字で、このように書きなすっていた。

義経様が私北の方に薄情であるのならば、私も義経様への気持ちが変わってしまえよ。どうして恨めしい義経様を恋しく思っているのでしょうか。

とあったのを、弁慶は拝見して、今のお言葉は、（義経を）忘れ申し上げなさないものだとしみじみと趣深く、急いで判官殿にこのように申し上げると、（義経は）「それならば」といっていらつしやり、「気の短いお恨みですな。義経もお迎えに参上しました」といつて、ずっと中に入りなされたので、（北の方は）夢のような気持ちがして、訪れに辛さが増す思いで涙を塞き止められない。